

## 序に代えて：田村均先生の Cogito

本『名古屋大学哲学論集』は、田村均先生ご退職記念号である。先生は、1989年の名古屋大学赴任以来、29年の長きにわたって教育・研究にあたってこられた。

今回の『論集』にも若き研究者たちの論文が掲載されているが、先生の学術誌掲載第1作は、「現象主義の検討」(『哲学論叢』1982年)、エイヤーのセンス・データ説とそれに対するオースティンの批判を扱う論文であった。それ以後、先生は精力的にイギリス経験論哲学、とくにヒューム、ボイル、ロック、因果説、人格の同一性の問題を中心に研究を進め、とくにロックについては4本の論文を1992年から1996年にかけて発表された。しかしその底流には、最初の論文で取り上げられたオースティン的な、社会における人間の言語行為、また言語に限定されない社会の中での人間の行為全般への関心があり、そしてその流れが現在のご研究にも繋がっているように思われる。

『哲學』1996年のロック論文と同じ年、田村先生は、「人格の同一性について——人類学的視点と哲学的視点——」(『名古屋大学文学部研究論集(哲学)』)を発表された。この論文において田村先生は、第1部で、マルセル・モースやルイ・デュモンといった人類学者による人格概念、および近代的個人概念の形成史を、また第2部で、ロック、ヒュームといった哲学者による人格同一性の議論を取り上げ、「意識として同定される近代的個人という存在が一つの虚構である」ことを示そうと試みられる。論文の「むすび」には次のように記されている。

以上のように、人格同一性に関するロックの立場もヒュームの立場も、意識の自己同一的な存在を前提しつつ意識としての人格の同一性を説明する、という循環に巻き込まれてしまう。・・・

マルセル・モースにもルイ・デュモンにも共通しているのは、ヒトが自我や個人というあり方をとるのは、何らかの社会的な力に呼応したり対決したりすることを通じてなのだ、という見方である。・・・一切の社会性を脱ぎ捨てて、純粹に自己意識として同定される——ことが期待される——ような近代的な人格や個人は、精神的に見れば、一種の異常事態である。

・・・ヒュームが採用できなかつた・・・諸知覚を意識において結合している諸原理は思惟ではない、という・・・選択肢は、ヒュームにとっては自滅的に見えたかも知れないが、われわれにとっては、必ずしもそうではない。思惟の外部にある何か、人格を統合している、ということに過ぎない。

デュモンの図式を借りれば、・・・ヒトを個人たらしめるのは、世俗に対する関与である。・・・ヒトを個人とするのは、思惟の外部にある世俗という実在なのである。

一方、モースの図式を借りれば、思惟の外部の何かは、たとえば、氏族社会においては、ある役割の所作として社会的に設定された振る舞い方のきまりかもしれない。・・・私は、私が決めたのではない仕方振る舞うある役柄だ、というわけである。あるいは、キリスト教的世界では、人間の魂の形而上学的次元として設定される神への関与かもしれない。・・・

われわれの思惟の外部は、二つの方向に広がっている。一つは、上に述べたように社会の方向である。もう一つは、・・・生き物としてのヒトの次元、つまり、身体としてのヒトの方向である。人格同一性の議論が陥った循環から脱出するには、自分自身の意識に関与してくる社会と身体とを意識に先立つものとして認めればよい。いずれにせよ、ヒトを一個の「私」として統合しているのは、ヒトの思惟の外にある何らかの力なのである。

一方には、意識、精神、自己としてのヒトがあり、他方には、人類学的なヒト、身体としての生物学的なヒトがある。どちらが先なのか？ 2000年から2006年にかけて執筆された一連の論文、(1)「私は考える、ゆえに、何があるのか？——コギトの自然化と社会化の試み——」、(2)「私は考えるとは、何をすることなのか？——心の理論に関する発達心理学の最近の研究から——」、(3)「『考える私』以前——デカルト的自我と幼児の自己認識——」(いずれも『名古屋大学文学部研究論集(哲学)』)の中で、田村先生はデカルトのコギトを取り上げてこの問題を考察される。結論的に言えば、「私は考えるということが成り立っているときに、それに論理的に先だって存在しているのは、私という実体(身体)だけではなくて、私とあなたとその他すべての同種の他の個体からなる生き物としてのヒトの社会である」((2)の89頁)。

しかし、「人格の同一性について」で主張されているように、「私は、私が決めたの

ではない仕方では振る舞うある役柄」であるとしたとき、「私」が振る舞うよう求められている事柄が、私の望みに反することが時として（あるいは、しばしば）起こるのではないだろうか？ その極端な例が自己犠牲であろう。しかし、その場合、本当に私の役柄と私の望みは二者択一的に対立しているものであろうか？ 自己犠牲を選択する人は、そう望んでその行為を選び取っているのではないだろうか？ そもそも近代哲学が「一つの不可分な意志」を想定するのは正しいのであろうか？ 田村先生は、「人格の同一性について——人類学的視点と哲学的視点——」の翌年（1997年）、それまでの諸考察をもとに、「自己犠牲の倫理的的分析」（『名古屋大学文学部研究論集（哲学）』）を発表される。ここから始まる一連の「自己犠牲」関係の論文は、デカルト的自己への挑戦を行為論の側面から補完するものであった。2010年に『哲学』に発表された「自己犠牲的行為の説明——行為の演技論的分析への序論——」は、次のように結ばれる。

行為者は、その場面で期待される行為のシナリオを察知し、そのシナリオに込められた他人の意図に沿って自らの身体を意図的に動かし、自己犠牲的行為を役柄上の身振りとして遂行する・・・

・・・しかし、人が他人の意図や共有されたシナリオに従って行為するという現象は、現代の行為論において考察の主たる対象とはならなかった。その背景には、おそらく、古代ギリシア的な主知主義もキリスト教的な主意主義も、行為者の〈本気の決定〉のみを価値あるものと見る偏りをもつ、という事実があるだろう。

・・・行為者個人の気持ちを棚上げし、〈ゴッホの決定〉として演技的に振る舞うとは、結局、内心を偽る偽善であり、これが美德の解明になるはずはないという批判・・・に対しては、次のように答えておきたい。・・・私たちは、通常それぞれの内心の思念と公共的な善との不一致の可能性を相互に承認しあって暮らしている。この相互承認の下で社会的・共同的な次元を生きる時、私たちには、ちょうど意に沿わない台本を演じる俳優のように、社会に共有された美德の類型の遂行と、それへの内心の不同意を、同時に意図して両義的に行為せざるをえない局面が生じうる。行為の演技論的分析は、この日常の両義性を掬い上げ、私たちの自己理解を深めるために不可欠なのである。

田村先生による、行為の演技論的な分析は、その後、ごっこ遊び、虚構と言語行為論、フィクション論、演技論の検討を通して展開し、その過程で2016年にはケンダル・ウォルトン『フィクションとは何か ごっこ遊びと芸術』の翻訳(名古屋大学出版会)も出版される。

この「自己犠牲」を主題とすることご研究は、ご退職の後も継続して続くはずである。論文「自己犠牲的行為の説明」の冒頭の言葉は、非常に挑戦的である。「本論文の目的は、自己犠牲という行為類型の分析を通じ、人間の行為に関して、哲学的常識に反した一つの提案をすることである。その提案は、端的に言えば、〈行為は、マネや演技やゴッコ遊びとして分析され、説明されるべきだ〉ということである。」堅実な近代哲学理解に基づきつつ、自己犠牲に焦点を絞った研究を通して、近代哲学の枠を超えようとする田村先生のゴギトの試みは、必ずや学界に一石を投じるものとなるであろう。新たなご著書の上梓が非常に待たれるものである。

金山弥平